ロッドワールド

白夜

注意事項

【小説タイトル】
ロッドワールド

【Ｎコード】
Ｎ５３８９ＢＢ

【作者名】
白夜

【あらすじ】
ある日突然、中野一樹の通う高校の生徒４３２人が異世界に飛ばされた。迷宮ありの魔法ありの世界ならしい。チート無しの正真正銘の凡人が死なないように頑張る話。※初めて文章を書きます。稚拙な点が多いと思います。改善しようと思っているので批評や指摘も大歓迎です。

プロローグ（前書き）

これから宜しくお願いいたします。

プロローグ

それは突然の出来事だった。
中野一樹はつい先程まで教室で藤原俊吾や川上拓哉と雑談していた。
急に目の前が真っ暗になり浮遊感を体験したと思ったら気が付くと見たことのない部屋にいた。
一樹と一緒に喋っていた俊吾や拓哉だけでなく他のクラスメイト達も一人残らず居なくなっていた。
目の前にはスーツ姿の男性がいた。
「あのー、すみませんがここは何処なのでしょうか」
「ここは【ロッドワールド】という。この世界には君が通っていた高校の生徒達４３２人が召喚されている。元の世界に帰るには迷宮を攻略するしかない」
「詳しい事は説明書に書いてあるのでよく読んでおくように。ここでどのように暮らしていくかは全て君次第。では健闘を祈る」
口早にそう言うと男性は光に包まれて次の瞬間には消え去っていた。
後には呆気に取られた一樹だけが残された。

「……とりあえず状況を確認しよう」

周りを見渡すとテーブルの上に説明書があったので、椅子に座って読み始めた。

◆

〈説明書〉

〈初めに〉

ここは神が作り出した世界【ロッドワールド】

元の世界に戻るには迷宮を攻略するしかありません。

与えられた支給品を装備して迷宮へ行き、徘徊しているモンスターを倒すことで金を稼げます。現在は地下四階にいます。

地下にいる間は他の人と接触出来ません。

自力で攻略して下さい。

この説明書は地下の迷宮についてだけです。

地上の迷宮についての説明書は0階にある街【タウン】にて販売しております。

因みに【タウン】に到着後は地下に戻れません。

〈レストルーム〉

この部屋は仮の拠点です。

初期設備はテーブル・椅子・トイレ・浴室・ベッド・キッチン・タンスです。

必要な物は商店にて購入出来ます。

〈戦闘〉

基本的にロッドと呼ばれる棒状の物を用いて魔法を発動させモンスターを倒します。

ロッドにはレベルがあり、レベルが高くなる程性能が向上します。ロッドには属性があるので注意して下さい。

魔法を発動させる際にはロッドの保有ポイントを消費します。保有ポイントを回復するには《チャージ》というスキルが必要です。

支給品に習得方法についての説明があるのでよくお読み下さい。

〈支給品〉

・ファイアーロッド（レベル１）一本
最大保有ポイントは５０です。
発動出来る魔法は二種類です。【登録所】で選択しておいて下さい。

・初期防具一式
装備の仕方は取扱説明書を参照すること。

・治療薬（小）三個
傷口に塗ると即座に塞がっていく。

・修復薬（小）三個
ロッドの損傷部分を修復する。

・火の石（小）三個
ファイアーロッドの保有ポイントを５０回復する。

・財布（現金１００００円）

・道具袋（小）
質量や体積に関係なくアイテムを五十個収納できる。

・スキル《チャージ》習得方法
回復させるロッドを右手に、消費する石を左手に持った状態で《チャージ》と唱えるだけである。

〈地下迷宮〉

光源がないので明かりを用意する必要がある。

迷宮の構造が変化することはない。
別の階に行く方法は転移装置を探し出すしかない。

◆

「……よく分からんが【タウン】を目指して行けば良いんだな。……それじゃあ楽しみつつ死なないように頑張るか」
突然の出来事に戸惑っていた一樹だが、この世界を楽しむことに決めたのだった。

◇

初めて見る防具に悪戦苦闘した一樹だが、漸く動きに慣れたため【登録所】に向かう。
説明書を読む限りでは登録したいロッドを機械に差し込むと、ディスプレイに選択できる魔法が表示されるようだ。
実際にやってみるとディスプレイにいくつかの魔法が表示された。
〈単発型〉一回10ポイント消費
・ファイアーボール：飛距離△　威力△　精度△　速度×
攻撃範囲△

・ファイアーアロー：飛距離▲　威力×　精度▲　速度△
　攻撃範囲×
〈連射型〉一弾１ポイント消費　弾数を指定する
・ファイアーニードル：飛距離×　威力×　精度△　速度▲
　攻撃範囲×
〈範囲型〉一回２０ポイント消費
・ファイアーブレス：飛距離×　威力×　精度△　速度×
　攻撃範囲▲
〈防御型〉十秒１０ポイント消費
・ファイアーウォール：一辺一メートルの壁が出現
〈支援型〉一時間１０ポイント消費
・ファイアートーチ：周辺を明るく照らす

評価：×＜△＜▲

「迷宮内は暗いから一本はファイアートーチ専用にする必要があるしなぁ。」

「ファイアーロッドをもう一本用意したら何を登録しようか。……威力重視のファイアーボールに防御のファイアーウォールかな。それに回復薬とか火の石も用意しないと」

　いくら面白そうだと思っても自身の命を危険に晒す人がいるはずない。

　一樹も例に漏れずに安全性にばかり傾倒するのも仕方がないこ

とだろう。

因みにファイアーロッド（レベル１）は一本３０００円、回復薬（小）と修復薬（小）は共に一個３００円、火の石（小）は一個５００円である。

◇

最終的な一樹の装備品はこうなった。

ファイアーロッド（レベル１）《ファイアートーチ》
ファイアーロッド（レベル１）《ファイアーボール》《ファイアーウォール》
火の石（小）十個
回復薬（小）七個
修復薬（小）五個
初期防具一式
現金１７００円

プロローグ（後書き）

誤字脱字報告、感想、批評、指摘何でもどうぞ。

初めての迷宮探索

「皆さん静粛に願います。間もなく第五百三回迷宮攻略が開始致します」

「開始に先立ちましてボーナスルーレットを行わせて頂きます。……ではルーレットスタート」

「…………今回の特殊装備を獲得したのは、内山咲、佐々木康介、田島綾香、堀江光輝、渡辺哲也の五名となりました」

「以上をもちまして今回の放送を終了させて頂きます。次回の放送までごゆるりとお楽しみ下さい」

◆

一通り準備を整えた一樹は迷宮探索をしていた。ファイアートーチの明かりを頼りに歩くこと約二十分、漸くモンスターを発見したところである。

一樹が見たのは大型犬程の大きさで茶色の毛を生やしたモンスターの後ろ姿だった。

気付かれないために明かりを弱くして静かに近づき先制攻撃を仕掛けた。

「……《ファイアーボール》」

そう唱えるとロッドの先から出た火の玉が犬型モンスターに向かっていった。突然の不意打ちに対処できなかったようで直撃したようだ。

犬型モンスターが襲ってくることを警戒していた一樹だが、予想に反して反撃してこなかった。不思議に思ったが理由はすぐ解った。

「えっ、弱っ……ファイアーボール一発で倒せるのかよ」

簡単に倒せることが判明したので見つかることを恐れずに転移装置を探すことにした。拠点に戻る唯一の方法なので余裕のある間に場所を特定する必要があるのだ。

◇

三時間後

あれから十体の犬型モンスターと八体の蝙蝠型モンスターを倒していた。最初の頃はぎこちなかった動きだが漸くロッドの扱いにも慣れ始めていた。モンスターが一体ずつ出て来ているため、一樹

は未だに怪我することなく余裕を持って対処できていた。

蝙蝠型モンスターは動作が遅くファイアーボール一発で倒せるため、気が付きさえすれば余裕で対処できる相手である。

しかしながら、現在はとある問題が一樹を悩ませている。

「……ノドが渇いたなぁ。何か飲み物が欲しい」

準備していた時にはそこまで気付かなかったが、長時間迷宮の探索を行うのであれば体調にも注意しておく必要があるのだ。

軽い脱水症状と極度の緊張により一樹の身体は限界ギリギリの状態だった。それに加えて転移装置も未だに発見出来ていなかった。一樹は精神的に追い詰められていた。

気の向くまま歩いていたのが転移装置を発見出来ない最大の要因なのだが一樹の知る由の無いことである。

そのため背後から静かに近づいてくるモンスターの存在に気付かなかったのも仕方ない事だろう。

「転移装置なんて本当にあるのか……いてっ」

突然の衝撃でよろけた一樹だが素早く後ろを確認したところ、兎型モンスターの脱兎の如く逃げていく後ろ姿が見えた。ただ不意打ちを受けてもロッドを二本共手放さなかった点は評価すべきだろう。ロッドが無ければ一樹はただの弱者なのだから。

今更攻撃しても仕方ないと思い直し、攻撃を受けた部分を確認

する。

「……ふぅ、特に怪我したところはないようだ。攻撃されたところも少し痛むぐらいで問題無いな」

気を取り直して探索を再開した。

◇

更に三十分後。

あれからモンスターに遭遇することなく迷宮探索をした結果、漸く転移装置を発見出来た。

一樹は拠点に戻ってから食事や風呂等を済ませて人心地がつくと装備品の補充を行った。今回失念していた食料品もその中に含まれている。

今回得られたアイテムの合計金額は４４００円だった。しかし火の石を五個消費したため利益は１９００円となった。

その中で食料や生活用品を購入しつつ、装備品の質を向上するための資金を調達しないといけないというのは中々大変なことだと痛感した。

「あっ……。また地下三階から探索するのだから簡単な地図を用意した方が時間節約になるんじゃ……」

漸く地図という考えに至った一樹は筆記用具と用紙も購入して、覚えている限り迷宮の構造を書き記していった。迷宮内では両手が塞がっているし、地図を書いている間に攻撃される心配があるので拠点でしか書けなかったりするのだ。

一通り書き終えると疲れが一気に押し寄せてきた。迷宮探索一日目ということで疲れていたのであろう、一樹は横になった途端間もなく意識を手放した。

初めての迷宮探索（後書き）

〔モンスター紹介〕

・スモールドッグ（犬型モンスター）：攻撃魔法一発で倒せる。攻撃力は強い。一体２００円。

・ビッグバット（蝙蝠型モンスター）：攻撃魔法一発で倒せる。動きが鈍い。一体３００円。

・エスケープラビット（兎型モンスター）：攻撃魔法一発で倒せる。動きが速く背後からのヒット＆アウェイを攻撃パターンとしているが攻撃力は弱い。一体５００円。

地下二階

翌日。

目を覚ました一樹は見慣れない部屋に一瞬困惑したが、昨日の出来事を思い出し嘆息をもらす。
心の何処かで夢だと考えていたのだろう。一先ず今後の計画を立てる。

昨日着ていた服はあちこち歩き回っていたため汚れが目立っていた。
下着も新しくしたいので商店にて三日間分購入しておく。
洗濯機が置いてなかったので着た服は風呂場で洗う事にする。何だかんだ言っても金は必要なので少しでも節約したいのだ。

一緒に買ってきた朝食を食べ終えて、準備を整えた一樹は再び地下三階にやって来た。地下二階へ行くには地下三階にある転移装置を使うしかないのだ。
本当は隅々まで探索してみたいが強いモンスターと遭遇した場合、最悪死にかねないので最短経路で突破することにした。

昨晩書いた地図を頭に叩き込んでおいたため一時間程で転移装置に到着した。
移動中に犬型モンスター四体と蝙蝠型モンスター三体に遭遇したが、全てファイアーボールで倒していた。得られたアイテムは相変わらず石だけだった。

因みに兎型モンスターには遭遇しなかった。もし遭遇しても攻撃を当てられる自信がないので安堵した。

地下二階に来たがどんなモンスターが出現するか解らないので、直ぐにに逃げ込める様に転移装置の近くを歩き回る。

最初に発見したのは木型モンスターだった。二本の太い枝を腕の様にし、数多くの根を器用に動かしてゆっくりとこちらに向かってくる。

「《ファイアーボール》！！」

一樹の放ったファイアーボールは木型モンスターに直撃した。幹の一部に引火した炎が瞬く間に全体へと燃え広がったが、気にする様子も無く向かって来る。

燃え盛る枝を振り回して来るが緩慢な動きのため余裕で避けてファイアーボールを放つ。

再び直撃すると木型モンスターは消え去り、石だけが残されていた。

再び現れた木型モンスターも同様に倒そうと狙いを定めて二連続でファイアーボールを唱える。ところがファイアーボールは一度しか発動しなかったため、燃え盛る太い枝が一樹に迫り来る。

困惑しながらも後方に跳んで回避したが、焦っていたため足を滑らせて尻餅をついてしまう。

原因に心当たりが有るようで腰につけた道具袋へ手を伸ばすが、無茶苦茶に振り回されている太い枝が迫っていた。

「……《チャージ》！《ファイアーボール》！」

ファイアーボールが木型モンスターに当たり間一髪で助かる。
魔法が発動しなかったのはロッドの保有ポイントを消費し切ったからであった。
最大保有ポイントは５０なので、ポイントを無駄にしないためには使い切ってからチャージする必要があるのだ。
そのためこう言った事態はよく発生するのである。これに素早く対処できる事が迷宮内で生き残るための最低条件なのだ。
因みに今までの迷宮攻略における死亡理由の約四割が保有ポイントの把握ミスだったりするのだが、一樹が知る由も無い。

保有ポイントを気にする様にして再び迷宮探索を始める。
次に遭遇したのは一メートル程の木の棒を右手に持っている土でできた人形型モンスターだった。
先に発見されていたらしく、糸で操られているかの様なぎこちない動きで迫って来る。

一直線に駆けて来るが慌てずファイアーボールを二連続で唱える。
一発目は木の棒に阻まれたが、二発目は胴体部分に当たる。多少土を撒き散らしたが、燃え盛る木の棒を振り回しながら人形型モンスターは依然として向かって来る。
十分距離を保ちつつファイアーボールを放つが、またしても木の棒に阻まれる。
その瞬間木の棒が粉砕した。どうやらファイアーボール二発分の威力に耐えられなかった様だ。
再度ファイアーボールを放つと人形型モンスターは消え去り、石だけが残っていた。

◇

万全を期すため火の石の予備が三個を切った時点で転移装置に向かう。

あれから木型モンスター四体と人形型モンスター三体と蜂型モンスター二体を倒していた。

蜂型モンスターは素早く空中を飛び回り、遠距離から針を飛ばして攻撃してきた。
ファイアーボールを放つが、針により相殺されたり回避されてしまう。

結局ファイアーボールを乱発してどうにか倒した。一発当てるだけで倒せたのが幸いだった。

因みに今回は無傷というわけではなく、身体の至る所に木の枝や棒や針から受けた攻撃の跡が見受けられた。
三時間程戦闘の連続だったため心身共に疲れていた。

特に問題無く転移装置に辿り着き、拠点へと戻って来る。

モンスターから得た石を売却して、装備品の修理や消耗品の補充をした。
売ってみたところ、木型モンスターも人形型モンスターも蜂型モンスターも一体４００円だった。
防具の修理には一日必要ならしいので、新しい防具を買うことにした。
ロッドを予備用にもう一本欲しいので、今までと同じ安い物を買った。

昼食を摂った後、休憩しつつ地下二階の地図を書いていく。

十分休憩した後、再び迷宮探索に向かう。拠点には必要最低限の生活用品しかないので、基本的に暇なのだ。

結局この日は地下一階への転移装置を見つけられずに探索を終えた。

地下二階（後書き）

〔モンスター紹介〕

・ムーブウッド（木型モンスター）：ファイアーボール二発で倒せる。攻撃に当たると痛い。一体４００円。

・ソイルドール（人形型モンスター）：ファイアーボール二発で倒せる。得物は木の棒。一体４００円。

・ニードルビー（蜂型モンスター）：攻撃魔法一発で倒せる。遠距離からの針攻撃が得意。針に毒はない。一体４００円。

ユニオンモンスター

三日経過したが、未だに一樹は地下一階に辿り着けていなかった。
原因は転移装置の前に陣取っているボスモンスターだった。
そのモンスターは、身長二メートル近くの巨大な人形型モンスターの背に木型モンスターが寄生しているといった様子であり、倒さないと転移装置を使えそうにないのだ。

何度か闘ってみるも、人形型モンスターと間合いを取ろうとすれば、木型モンスターの伸縮自在な太い枝が向かって来て邪魔をしてきた。今度は木型モンスターの枝ばかりに注意していると、人形型モンスターが木の棒を振り回してきた。
互いに協力し合っており攻撃用のロッド一本では足りないと思ったので、新しいロッドを購入するため金を貯めていたのだ。

漸く購入資金を調達出来たので、ロッドを買ってきたところである。
消費した火の石も補充する必要があったので、中々貯まらなかったのだ。
登録する魔法はファイアーニードルとファイアーブレスにした。

試し撃ちをしてみたが、ファイアーニードルは一発当たりの威力が弱すぎるので牽制用にしか使えそうになかった。
ファイアーブレスは広範囲に攻撃出来るが、威力が弱く結構近付かないと当たらなかった。

◇

装備を整えた一樹は目標地点へと向かった。拠点を出発してから約二時間で到着した。
その間に犬型モンスターと蝙蝠型モンスターと木型モンスターを三体ずつ倒し、人形型モンスターと蜂型モンスターを二体ずつ倒していた。

ボスモンスターの姿を確認した途端走り込みながら攻撃を始めた。

「《ファイアーニードル》、二十発！！」

先ずは枝による攻撃に対処しつつ、モンスターに肉薄する。
撃ち込んだ弾数を数えておき、二十発撃ち次第ファイアーブレスを放つ。
背中に寄生している木型モンスターにも燃え付いた事を確認したので、ファイアートーチを解除する。

一樹の周りは暗くなったが攻撃する相手はよく見えている。
一度木型モンスターに燃え付いた火は倒されるまで燃え続けるという性質を利用したのだった。
この作戦を実行するためには、ボスモンスターとの戦闘中に他のモンスターが出現しない事を確認する必要があるが、金を貯めている最中に観察しており、大丈夫だと判断したのだった。
ファイアーボールやファイアーニードルでは人形型モンスターの持つ木の棒に阻止されるが、至近距離からのファイアーブレスでは背後にいる木型モンスターも巻き込むことが出来るのだ。
このためだけにファイアーブレスを登録したといっても過言ではな

い程である。

これにより枝を迎撃するためのロッドとモンスターを倒すためのロッドを別々に持てる様になったのだ。

素早く後方に移動して距離を取ろうとするが、人形型モンスターが燃え盛る木の棒を振り回しながら襲い掛かって来る。

ファイアーボールを三連続で放つも一発は木の棒に阻まれ、もう一発は枝で防がれたので、人形型モンスターに当たったのは一発だけだった。

木の棒は粉砕した様だが、背後にいる木型モンスターから新しい木の棒を受け取ってこちらに向かって突進して来ていた。

木型モンスターは援護のためなのか新しく枝を二本伸ばしてきた。

ファイアーニードルを乱発するが、弾切れとなった瞬間に枝から受けた攻撃による衝撃で勢いよく吹き飛ばされる。

幸いモンスターと距離を取ることに成功したので、ロッドの保有ポイントに注意しつつファイアーボールとファイアーニードルを放ち続けた。

人形型モンスターにはファイアーボールを放ち、伸びて来る枝にはファイアーニードルで対処する。

時折枝が多過ぎて対処しきれない場合は、回避するかファイアーウォールを唱える。

但しファイアーウォールの使用はモンスターの接近を許す事になるので、最終手段である。

これが光源を確保した後の一樹の考えた作戦であった。
実際には何度か攻撃を受けたため回復薬を消費したものの、ほぼ作戦通りに行動出来ていた。

誤算があったとすれば、それはモンスターのしぶとさであった。
二種類のモンスターが共生関係にあった事が原因なのか定かでないが、単体であればファイアーボール二発ずつで倒せるモンスターに対して、八発以上撃ち込む必要があったのだった。

漸くモンスターを倒したので石を手に入れて直ぐに拠点へ帰ろうとするが、不意に立ち止まる。

「……ん、何だこれ？何何…………身代わりの腕輪？」

どうやら先程倒したモンスターが落としたアイテムなようだ。
このアイテムの説明書も一緒に落ちている。

〈身代わりの腕輪〉
・この腕輪は装備者の死を一度だけ無かったことに出来る。
・この腕輪を使用した装備者は最後に利用した拠点へと帰還する。
・その際装備者の身体は完全に治癒される。

一先ず身代わりの腕輪を装備して拠点へ転移する。
疲れていたので消耗品の補充等は後回しにして、着替えて横になった途端熟睡した。

ユニオンモンスター（後書き）

〔モンスター紹介〕

・キラーツリー（木型モンスターと人形型モンスターのユニオンモンスター）：地下一階への転移装置を利用するためには倒す必要がある。木型モンスターによる枝攻撃と人形型モンスターによる棒攻撃を行う。一体９００円。

・ユニオンモンスター：複数の種類のモンスターが結合したもの。赤字覚悟で闘う必要があるが、商店に無いアイテムを手に入れられる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5389bb/

ロッドワールド

2012年10月18日13時18分発行